

文京通信

ふみのみやこ

文部科学省認可通信教育

放送大学東京文京学習センター

機関誌 No.16

2023年8月発行



小石川植物園で撮影しました。P7にも写真を掲載しています。

目次

表紙

— series — この一冊	P1
着任された先生方からのご挨拶	
所長 熊野 純彦	P2
客員教員 小又 志郎	P3
客員教員 丸山 純一	P4
客員教員ゼミのご紹介	P5
文京区のおすすめ (小石川植物園)	P7
行事のご報告 (2023年・前半)	P8

— series この一冊 — 【第1回】 所長 熊野 純彦

前回の特集で好評だった「おすすめの本」を新所長の熊野先生にも伺ってみました。



『判断力批判』 カント

春の海は美しい。穏やかな午後の日差しのなかで小波を寄せてはかえず海には、だれでも心惹かれる。これに対して、嵐に逆巻く夏の海は恐ろしいが、嵐の海にはそれでも、どこかひとを惹きつけるところもあるだろう。あるいは、ひとはその凄まじさに、いわば弾きかえされながらも、他方でそれに魅入られてしまうことがあるはずだ。夏の嵐は、かくて私たちの心のなかに反撥と吸引の感情を、崇高さの思いを呼びおこす。どうしてだろうか。

哲学の本というと、とっつきが悪い印象がある。そこには、翻訳の問題から始まり、いろいろな理由があるけれども、身も蓋もない原因のひとつとして、「そもそも何を問題としているのか分からない」ということがあるかもしれない。その意味では、そこで問われている事柄そのものが直感的に、また感覚的にも捉えやすく、入り口が分かりやすい古典からまず手に取ってみるのも、哲学的な思考に親しむひとつの方法だろう。

カントといえば、教科書的にいえば近代を代表する哲学者のひとりであって、その主著、いわゆる三批判書(『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』)は西欧の典型的な哲学書である。この三冊の主著を、その順番どおりに読みすすめること、まず『純粋理性批判』を手に取ってみることを、私自身はかならずしも勧めない。あなたが、たとえば晴れわたる秋の空の下、視界一面をおおう草原を美しいと感じ、他方、厳冬のさなか、雪を戴いて聳えたつ山岳にどこか気高さを感じて、それはどうしてなのだろう、とふと思うことがあるならば、まずいわゆる第三批判つまり『判断力批判』を手に取って見たらどうだろう。手に入りやすい翻訳としては岩波文庫でも篠田英雄訳があるし、作品社から新訳も出ている。ただ、後者は箱入りの豪華本だが、そのぶんすこし値が張るのが残念なところ。自分の旧著を挙げるのは、すこしはしたくないけれども、ちなみに入門書としては、拙著『カント 美と倫理とのほざまで』(講談社、2017年)が『判断力批判』全体の解説をこころみている。

着任された先生方からのご挨拶



「新任のご挨拶」

東京文京学習センター 所長 熊野 純彦



4月に、林徹先生の後任として東京文京学習センター所長となりました。それから三か月経ったことが、自分ではとても信じられません。はじめて所長室の机のまえに座ったのが、ほんの昨日のような気もするし、それからもういくつもの年が過ぎ去ったような気もしてならないのです。とてもありふれた感想ですけれど、この数か月がことさら長いもののように感じられるのは、それだけ多くの新しい経験を積ませて頂いたからでしょうし、逆にまたおなじ時間がひどく短いもののように思い起されるのは、その期間を無我夢中でなんとか過ごしてきたからでしょう。そのどちらにしても、日々あらたなことばかりの90日をどうにかこうにか消化することができたのも、なにも分からないわたしを、万事につけて支えて下さっている、事務長、両係長をはじめとした職員の皆さんのおかげであることを、まずはご報告しておかなければなりません。

まえの職場には、前世紀のおわりから、本年の三月まで籍を置いていましたから、それはほとんど四半世紀におよぶ時間ということになります。それだけ長くおなじ場所にいるとしだいに責任が増えてくる一方で、新しいひとやものとの出会いがすこしずつ減ってゆき、驚きや、場合によって楽しみも少なくなっただけでゆく面があることは否定できません。わたしはいま、多くの皆さんに手取り足取り教えて頂きながら、あらたなものや、こととの出会いを繰り返しているところで、それが久しぶりに味わう驚きと楽しみともなっています。

これは放送大学のホームページでもすでに書いたことですが、直近の職場に着任する以前、さらに10年ほど遡って、1990年の春に大学の常勤職に就いて以来、教員生活をつうじて、西洋哲学・倫理思想史にかんする講義・ゼミを担当するほか、主としてドイツ・フランスの哲学・倫理学をめぐる研究の傍ら、日本近世や近代の思想家、文学者についても勉強してきました。専門は、哲学・倫理学ということになっておりますけれども、私自身は（ある意味ではまことに残念で恥ずかしいことながら）ひとつの問題をじっくりひとりで考え抜いてゆくタイプの哲学・倫理学研究者ではなく、そのつどいろいろなテキストを相手にし、テキストの作者と対話を重ねながら（多くの著者はすでにこの世のひとではないのですが、テキストを読むとはやはりひとつの「対話」です）、そのときどきにさまざまな問題を考えてきました。研究者としてはあまり褒められたことではない、そうした経験も活かしながら、学生の皆さんのお手伝いできれば、と考えております。



「物理を学ぶこと、演習の大切さ」

東京文京学習センター 客員教員 小又 志郎



今年度より東京文京学習センターの客員教員として、学生の皆様のサポートをすることになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

これまで物理学、特に素粒子論、数理物理学を中心とする理論物理学の分野で学び、研究してきました。物理学というと、世間一般には難解であるとして敬遠されがちですが、日常の自然現象も、原子・素粒子や宇宙のような日常から離れた領域の現象も、少数の原理から説明できることは物理の醍醐味です。そうした自然現象には、まだまだ未説明のことがたくさんあり、物理を勉強していて興味は尽きません。

一方、物理が敬遠される理由の一つに、数式が多用されることもあるようです。確かに専門的に勉強しようとするればある程度の数学は必要ですが、数学の難しさのせいで、自然現象について不思議だと思ふ気持ちや探究心を捨ててしまうのは非常にもったいないです。物理についてあまり数式を使わずに丁寧に書かれた本も最近では多く出ているので、数学が苦手な人は参照してみるとよいでしょう。

私自身は数学が好きで、研究分野も物理と数学の交わるころなのですが、数学に興味をもっている学生さんも多くいらっしゃいます。そのような学生にとって、物理や数学を勉強する上で大切なこととして演習があります。演習というのは、本を読んだり放送授業を視聴したりするだけではなく、自分で問題を解き、その結果を他の学生の前で発表し、学生どうしで、あるいは講師との間で討論して、誤りや不十分なところがあれば修正し、理解を確実にしていくことです。放送大学では、通信教育という性質上、このような演習の機会が少ないことはずっと残念に思っています。そこで、私はこの学習センターで8年ほど前から面接授業の講師として、物理や数学の演習を担当してきました。

多くの先生方もおっしゃる通り、放送大学の学生、特に面接授業を履修する学生の皆さんはとても熱心に取り組み、授業でのやり取りで講師の側が勉強になることもしばしばです。多様な分野の魅力的な面接授業が実施されているので、学生の皆様はぜひ積極的に履修してみることをお勧めします。今後とも、面接授業ではできるだけ学生の皆さんのニーズに応えられるように、工夫を重ねていくつもりです。

また、面接授業に加えて、私は数学について客員ゼミ「多様体を学ぶ」、物理について客員ゼミ「量子力学勉強会」を実施しています。いずれも、高校レベルの疑問でもざっくばらんに質問できるようにしていますし、面接授業では時間的な制約もあってなかなかできない、専門的な物理や数学についても議論しています。興味のある方は学習センターに問い合わせてください。

なお私は20年ほど前からこの学習センター所属の学生でもあります。主として専門外の人文系・社会系・心理系の科目を履修し、一度卒業もしましたが、その後も興味のある科目をときどき勉強しています。学生としての経験からアドバイスできることもあるかもしれません。「学習相談」などを利用して気軽に声をかけてくださればと思います。



「着任のご挨拶」

東京文京学習センター 客員教員 丸山 純一



今年から客員教員となりました丸山です。東京文京学習センターの学生、教職員の皆様よろしくお願ひします。専門は心理学、特に社会心理学で、面接授業では「心理検査法基礎実習」を担当しています。

昨年、林徹前所長から客員のお話を伺ったとき、地方の大学に勤務して30年近く、大学の「雑用」を言い訳にあまり研究をしておこなった者には荷が重いとお伝えしましたが、林先生から心理学に興味・関心のある学生が大勢いるので、相談に乗ってあげて下さいと言われ、少しでも学生さんのお役に立てればと、また新型コロナの対応に尽力されていた林先生の申し出を断ることも心苦しく、分不相応にもお引き受けしました。

客員教員としては新米ですが、私と放送大学との関わりは長く、平成4年から8年間は埼玉学習センターで「社会心理学実習」という科目を担当していました。当時は1コマ2時間15分(45分×3)を隔週で5回実施して1単位でした。4つの実習課題を実施しましたが、レポートは1課題だけ提出すればよかったので、今より負担は軽かったといえます。4つの課題のうち2、3個は学期ごとに主任の山口勸先生(放送大学開学時の助教授で当時は東京大学の所属)を中心に新たな実験を面接授業担当者、TAの院生で考え、得られたデータは学会で発表していましたので、そこでの議論はたいへん勉強になりました。その時期、他の先生の代講で東京文京学習センターに一度教えに来たことがあります。その先生が40名の定員を指定し忘れたので、100名近い受講生となり、来所して驚いたことが印象に残っています。当時の校舎は床が板張りでしたが、今の校舎と外観は似ていました。丸ビルのように昔の雰囲気を残して新築したのかなと思っていましたが、教育大学出身の先生から改築と伺いましたので、それなら雰囲気が似ているはずだと納得がきました。

東京文京学習センターでは平成27年から教えていますので、今年で9年目です。その間、新型コロナで面接授業が中止になった学期もありました。その時期に在学していた学生さんはたいへん苦しい時期を過ごしたことでしょう。また、面接授業が再開されてからも「心理検査法基礎実習」はなかなか抽選に当たらないそうです。皆さんの希望通り受講できるよう私も考えていきたいと思ひます。

4月からこれまでに4名の学生さんの相談を受けましたが、公認心理師や臨床心理士など資格に関わる内容が主でした。国家資格化は非常に大きいことと認識を新たにしました。働きながらの資格取得にはたいへんな面もありますが、少しでも目標達成の助けになるよう努めたいと考えています。

最後になりますが、面接授業ではいろいろな質問があり、レポートも着想が素晴らしいものが多く、私自身たいへん勉強になっています。これからも授業で学生の皆さんと楽しく交流できればと思ひます。

客員教員ゼミのご紹介



東京文京学習センターでは、現在、客員教員ゼミを6つ開催しています。
今回の「文の京通信」では、個性豊かな先生方の客員教員ゼミをご紹介します。

センターの職員がいくつかのゼミに参加して写真を撮らせていただき、簡単な感想も掲載しましたので、少しでもゼミの雰囲気を感じていただけたと思います。現時点で募集中のゼミは、東京文京学習センターウェブサイトのトップページ(下記 URL or 右記 QR コード)のクイックリンクに、「2023 年度の客員教員ゼミ募集のお知らせ」のサイトを掲載していますので、詳細をご覧ください。

<https://www.sc.ouj.ac.jp/center/bunkyo/>



2023 年度、河村先生と小又先生のゼミが新しくスタートしました！

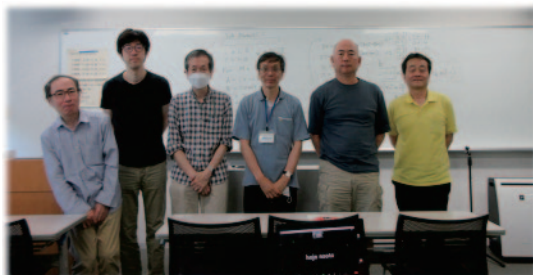
河村ゼミ

～ 数値計算プログラミング実習 ～

本ゼミでは、種々の数値計算法を理解し、講師とともにそれに対するプログラムを作成します。特に常微分方程式の数値解法に習熟し、常微分方程式で記述される諸現象の数値シミュレーションを行うことを最終的な目標とします。

～ 数値流体力学入門 ～

本ゼミでは、数値流体力学の基礎を学び、実際に身近な流体现象の数値シミュレーションを行います。たとえば室内気流の2次元数値シミュレーションのプログラムを組んで空気流を解析することを目標とします。



対面のゼミですが、Zoom で参加の方もいらっしゃいました。パソコンを持ち込んで熱心に学ぶ学生さんに、先生が都度丁寧に教えていらっしゃったのが印象的でした。



小又ゼミ ～ 多様体を学ぶ ～

多様体というのは、曲線や曲面などの図形の一般化であり、数学のみならず物理学でも使われる重要な概念です。また、初等数学で学ぶ微分積分や線型代数が具体的にどのように活かされるのかを体験できる格好の題材でもあります。テキストとして、藤岡敦『具体例から学ぶ多様体』(裳華房)を使い、少しずつ読んでいきます。



元々は小又先生の自主ゼミから客員教員ゼミになったので、年代は様々でも皆さん仲良く、先生を中心に意見や質問が飛び交っていました。

小又ゼミでは、7月から『量子力学勉強会』というテーマの、やや初心者向けのゼミも始まりました。難しいと思われがちな量子力学ですが、明解に書かれたテキストを初歩からゆっくり少しずつ読みながら勉強していきます。

継続中のゼミをご紹介します！

細谷ゼミ ～ 生物学を学ぶ ～

私の専門は「生物学」ですが、研究分野を詳しく上げると「原生生物学、細胞生物学」になりますでしょうか。地球上の様々な生き物は、皆様ご存知のように「細胞」でできています。私たちヒトの体は40-70兆個もの細胞でできており、「多細胞生物」とよばれています。一方、体が1個の細胞でできている、アメーバやゾウリムシのような「単細胞生物」も多数生息しています。何百個もの単細胞生物(藻類)が1個の単細胞生物(ミドリゾウリムシ)に入り込み共生している植物っぽい単細胞動物も見つかっています(ややこしくてすみません)。本ゼミでは、「細胞」の目線で、このような多様な生き物の不思議さ、面白さを語ろうと目論んでいます。他にも、生物に関係する話題ならなんでも歓迎、ゼミで議論しています。議論にあきたら、(筑波大に許可を頂き)放送大近くの大名屋敷跡(占春園)に出かけて行って、池に棲む微生物を顕微鏡で観察したりもしています。



3年目に入るゼミなので参加者も多く、ベテランゼミ生からの発言も活発で、和気あいあいとしたゼミでした。新人さんも温かく迎えられ、ますます盛り上がっていきそうです。

永原ゼミ ～ M (Musicology)クラス ・ C (Chorus)クラス ～

このゼミは2015年夏に始まり、当初は2018年3月の南関東ブロック学習センター合同による「第九を歌う」プロジェクトの一環として、「ゼロスタート」のメンバーを中心に基礎から学んでまいりました。M(Musicology)クラスとC(Chorus)クラスがあり、Mクラスは音楽学の講義で様々な音楽の考え方を学び、Cクラスは合唱の実技授業で、声楽の基礎と共に合唱作品の演奏を学びます。メンバーはMとC両方あるいは片方を受講しています。



Cクラスはサークル活動ではありません。ゼミのメンバーは皆さんアマチュアですが、専門的な発声や音楽作りを学びます。そのため、設立当初から、各パートそれぞれに経験豊かなTA(ティーチング・アシスタント)の先生方、専門のピアニストの先生をお招きして、ご指導とサポートをいただいております。Mクラスはすべてオンラインで、関西など遠方からのご参加もあります。2022年5月から10月頃まで、ベートーヴェン交響曲第9番スコアを使って、全楽章の魅力を勉強しました。楽譜はドイツのベーレンライター社版を用いました。スコアの面白さをわかっていただいたので、2023年からは、バッハの《マタイ受難曲》全曲を同様にベーレンライター社のスコアで少しずつ丁寧に勉強しています。映像と聖書とドイツ語の日本語訳と楽譜をふんだんに使っています。楽譜を自分で読める必要はありません。むしろ、楽譜から音楽の構成を「観る」ことを学びます。



レベルは様々(?)ということですが、皆さん音楽好きという共通点があって、とても楽しく練習されていました。

馬場ゼミ 新規ゼミのご案内

このゼミは、哲学の原典講読と、身近な社会問題を哲学的に検討することの二本立てで進めています。後者にかんしてこれまで取り上げてきたテーマは、「生命倫理」、「AIと人間」、「新型コロナウイルスと哲学」、「正義とは何か」などです。私たちが直面する現実の諸問題に対して、哲学の立場からどのようにアプローチできるか、みなさんと一緒に考えています。

ゼミは、Zoomと対面を併用して行っています。専門知識の有無は問いませんので、哲学に関心のある方のご参加をお待ちしています。(なお、後者のゼミは、2023年9月より新規開始予定)



馬場先生のゼミは、ベテランクラスと、初心者クラスに分かれているため、年に1度、初心者クラスをウェブサイトにて募集します。根強い人気のあるゼミで、最近ではZoomでの開催が多いようですが、今後は対面でも行う予定とのことでした。

小山ゼミ ～ 子ども学ゼミ ～

子どもの成長・発達、子どもを取り巻く現状と課題等、子ども全般に関することを皆で話しあっています。自分で興味のあることを調べ、発表していただくこともあります。現在は基本的にはZoomで開催しています。



(左・写真)
Zoomでの
ゼミの様子。
黄色の枠内が、
小山玲子先生
です。

小山先生のゼミは、今年で4年目になる男女ともに人気のあるゼミです。

今年、センターで開催した小山先生の講演会「子どもの主体性を伸ばす保育—幼児期の子どもの生活や遊びに必要な環境とは—」にも、多くの方に来ていただき、近年の幼児教育への関心の高さが窺えました。

文京区のおすすめ (小石川植物園)

当センターから歩いて5分程度(入口まで)に位置する「東京大学大学院理学系研究科附属植物園」は、一般には「小石川植物園」の名で呼ばれ親しまれており、植物学の研究・教育を目的とする東京大学の附属施設です。広大な敷地の中で、季節によって様々な木々や花々を楽しむことができます。自然を体感してリフレッシュするのにおすすめです！



行事のご報告（2023年・前半）

2月4日 公開講演会
対面 + オンライン

小山 玲子（放送大学客員准教授、秋草学園短期大学准教授）

「子どもの主体性を伸ばす保育—幼児期の子どもの生活や遊びに必要な環境とは—」

クラス会（対面）

2月12日、東京文京学習センターで3年ぶりに対面のクラス会を開催しました。締め切り前に定員いっぱいになるほどの大盛況でした。クラス会支援委員会・委員長の中村さんを始め、企画員の方を中心にコース別のグループで交流を図りました。東京文京学習センター所長と7名の客員教員の先生方にもご参加いただき、皆さんの「学び」についての悩みやアイデアを共有しました。最後は、任意の方が集まって記念撮影をしました。

【アンケートの声】

- 🍀 同じコースの方と話せて学習への意欲がわいた
- 🍀 生徒同士、教授と生徒間の交流が深められたことの意義は大きい
- 🍀 たくさんの学生がいることを改めて知った
- 🍀 良い会にしたいというクラス会支援委員会の思いが、懇親会や写真撮影等様々なシーンで垣間見られ、本当に参加してよかった
- 🍀 同席した方たちとLINEのグループを作った
- 🍀 グループの人数が企画員に対して多すぎた
- 🍀 対面ならではの雰囲気味わえた
- 🍀 お話した先生の客員教員ゼミに入るきっかけとなった



次回のクラス会へのご参加もお待ちしております！

3月11日 退任記念講演会
オンライン

林 徹（放送大学東京文京学習センター所長・放送大学教授）

「受け入れるコトバと排除するコトバ：言語の持つ2つの社会的側面」

星 薫（放送大学客員准教授）「平和心理学」

森 義仁（放送大学客員教授・お茶の水女子大学教授）「教養の化学を巡り」

卒業式・学位授与式

3月25日NHKホールにて開催



入学者の集い（オンライン）

4月9日、入学者の集いをオンラインで行いました。

東京文京学習センターに熊野所長が着任されて、初めてのご挨拶となりました。

東京文京学習センターのウェブサイトのトップページに載っている右のボタンをクリックしてください。所長、客員教員のご挨拶や、学び方ガイダンスの動画もご覧になれます。 ⇒

2023年度第1学期
入学者の
方々へ

発行者 東京文京学習センター 機関誌「文京通信」編集委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1 電話：03(5395)8688 メール：bunkyo-sc@ouj.ac.jp